

昔話を読み比べて気づくこと

仙波 純子

科目名：日本の昔話を読む 5-6

レベル：初級1・2／中級3・4・**5**／上級**6**・7・8

履修者数：35名

1. はじめに

授業で昔話を扱う場合、できるだけ多くの作品に触れさせようとする、一つ一つの作品の印象が薄れ、ただの紹介になりかねない。そこで、このクラスでは、一つの昔話について、複数のテキストを読み比べるという試みを実践している。その実際の取り組みを報告したい。

2. 教材

つぎの10篇を取り上げた。このうち、②、④、⑦、⑨は、それぞれ一種類のテキストを速読し、それ以外の6篇は、すべて数種のテキストを読み比べた。

①浦島太郎、②うぐいす長者、③かちかち山、④文福茶釜、⑤舌切雀、⑥花咲じじい、⑦おむすびころりん、⑧瘤取り爺さん、⑨猿蟹合戦、⑩鶴の恩返し

なお、⑥、⑦、⑧は、いずれも善良な爺さんと、その真似をする隣の爺さんが登場し、両者が対比される「隣の爺型」の話である。そこで、これら三つの昔話は、一つのグループとして、互いの共通点、相違点についても考えてみた。

3. 読み比べの実例：①浦島太郎

A、B二つのテキストを読み比べ、二つ目のBを読むときは、Aとどこが違うか注意して読むように指導した。その結果、学生たちはいくつかの相違点に気付いた。太郎の家族構成、子供たちから苛められた亀を救う場面、竜宮城へ招待される経緯、竜宮城での滞在中に地上で流れていた年月の長さなどである。時間の経過は、Aでは「何十年」であるのに対し、Bでは「七百年」である。学生たちは、Bの方が衝撃的であり、事実を知った太郎がショックのあまり、玉手箱を開けてしまうのも無理はないと感想を述べていた。

だが、AとBの一番大きな違いは、故郷に帰りたいと告げた太郎に、乙姫が土産として玉手箱を手渡す場面である。乙姫の言葉は次のようにまったく異なる。

A：村へ帰って、もし困ったことがあったら、この玉手箱を開けなさい。

B：決して蓋を開けないでください。

すでにBタイプの「浦島太郎」を翻訳で、あるいは日本語で読んだことのある学生は何人もいたが、Aタイプの話はだれも読んだことがなかった。Aについて学生たちに意見

を求めると、「開ければ爺さんになってしまう玉手箱を渡して『困ったことがあったら、これを開けなさい』と言う乙姫は性格が悪すぎる。」「何も悪いことをしていない太郎が最後になぜ不幸になるのか、納得がいかない。」「教訓が読み取れない。」など酷評が相次いだ。彼らはBの方が話として分かりやすいと言う。みんなでその理由について話し合い、「決して蓋を開けないでください」という乙姫の忠告に従わなかった太郎が、最後にその報いを受けたと考えれば、筋の通る話だということになった。Aに比べればBは構成もしっかりしているし、教訓も読み取りやすいというわけだ。

「開けるな」というタブーを犯した結果、突然老化してしまうBタイプの「浦島太郎」のモチーフは、「タブーの侵犯」である。そこで、「浦島太郎」のつぎに、「タブーの侵犯」をモチーフとした、②「うぐいす長者」を参考として紹介し、速読した。四つ目の蔵を開けるなという禁を破ったばかりに、うぐいすが変身していた家族も立派な屋敷も失ってしまう男の話である。このモチーフは、⑩の「鶴の恩返し」へとつながっていく。

4. 評価

出席率・授業への参加度という平常点のほかに、4回の宿題が主な評価の対象である。①、③、⑧について、それぞれ指定したテキストの要約文を200字程度で書く宿題と、⑥について意見文を400字程度にまとめる宿題を出した。要約文は返却時に、筆者作成の見本と、よく書けた添削済みの数名の学生の要約文、要約文中の文法上の誤り・不適切な言葉選びなどの改善例をプリントして配付した。意見文については、添削・返却後、それをもとに、各自にスピーチをさせた。

5. おわりに

昔話のテキストを読み比べることで、一つのテキストだけでは見えないものが見えてくるようになり、ある程度、深い読みができるようになったのではないと思う。参考までに、「学生授業アンケート」の自由記述欄に記載された学生たちの感想を紹介しておく。

- ・いろいろな昔話を読み比べて非常に面白い。 ・日本の昔話の意味を知った。
- ・日本の昔話を多様な物語の形式で知ることができた。 ・要約が上達した。
- ・日本の昔話に対しての理解を深めた。 ・日本語と日本文化も習ったので役立った。
- ・昔話の内容について話し合ったのがよかった。 ・日本の地方文化も学べた。
- ・紹介された昔話のテーマは似ていた。 ・他の有名な昔話も読んでみたい。

最後の二つの感想は、もっともな指摘である。「隣の爺型」の話が⑥、⑦、⑧と3回続いたので、これをもっと短くして、他の昔話を取り上げるなどの工夫が必要だろう。今後は、速読用の話と、ていねいに読み込む話とをバランスよく取り入れて、充実した授業内容にしてゆきたい。

(せんば じゅんこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)